慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	剣橋古代史 第十二巻 帝国の危機及び回復
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.7 (1940. 7) ,p.1013(133)- 1018(138)
JaLC DOI	10.14991/001.19400701-0133
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400701-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『劍橋古代史』第十二卷『帝國の危機及び回復』

高橋誠一郎

一

本書は『劍橋近世史』並びに『劍橋中世史』に次いで、連續せる歐羅巴諸民族史の最初の部分たる可く計畫せられた『劍橋古代史』の第十二卷として昨一千九百三十九年に發兌せられたものである。『劍橋中世史』は、コンスタンチヌス大帝が其の最後の勁敵リキニウス・リキニアヌスに對する勝利並びに十有六世紀間彼れの名によつて呼ばれて居つた都市、即ちコンスタンチノポリスの建設より始まるものであるから、紀元一百九十三年より同三百二十四年に於けるコンスタンチヌス大帝の勝利に至る迄を叙述せる本編は、當さに『劍橋古代史』の終編でなければならぬ。本古代史は、第一編『埃及及びバビロニア』の初版が公にせられた一千九百二十三年より數へて正さに十有六年の後、漸くにして其の完成を見たのである。此の終篇の編者はクック（S. A. Cook）、アドコック（F. E. Adcock）、チャールズワース（M. P. Charlesworth）及びベーンズ（N. H. Baynes）の四氏であつて、例によつて世界各國の學者が分擔執筆してゐる。

本篇は皇帝獨裁政治の發達、帝國を惱し之れを崩壞せしめんとせる危機並びに之れをして中世歐羅巴に取り古代

世界の所有であつた多くのものを相續することを可能ならしめた毅然たる回復と改造を叙し、更らに終期に於ける古代世界の經濟的、知識的及び藝術的性質並びに基督教會が鬪爭の後、羅馬國家と提携するに至る迄の帝國内に於ける其の發達を記述する。

[illegible]

全篇を通じて、吾人に取つて最も興味大なるは、ボン大學古代史教授哲學博士エルテル氏（F. Oertel）の執筆に係る第七章、帝國の經濟生活であらう。

西紀第二世紀は、既に同博士が本古代史の第十篇第十三章に於いて論述せるが如き、異常なる好條件に惠まれて高度の經濟的繁榮に到達した。平和が確立せられて交通安全なる廣大なる領域を抱有しつゝある帝國の體制中に於いては、其の主たる關心事が經濟的であり、舊都市文化に基礎を置き而して個人主義及び私企業を以つて特性とする經濟の一形態を維持し、而して斯くの如き體制に固有なる利益の總べてを收得するブルヂュワジイの成立が可能であつた。國家は間接には「自由放任主義」に從へる行動の自由及び有機的發達を保障せる政府の保護と其の寛大なる經濟政策とを通じ、又直接には經濟的活動を奬勵するの方策によつて故らに這箇ブールヂュワジイの活動を促進した。斯くて生產的なる經濟的中心は更らに人口夥多と爲り、而して自由競爭狀態の下に於いて經濟活動其の者は進歩し、而して時折は獨占に接近せる大規模生產の諸形態を取得することが出來た。往來頻繁なる街道が其の中に在つて全體を結紮せる全世界に亙れる羅馬帝國内に於ける夥しく多數の分立せる經濟的中心は、帝國の種々なる部分の間に、而して又、帝國と外國との間に顯著なる相互依存の關係を生ぜしめた。一方に於いては原始生產に從事しつゝある地方と他方に於いては原料品の處置が組織的に行はるゝ地方とは、種々なる中心に於ける種々なる種類の經濟的特殊化と共に、活潑なる相互交易及び相互貫通を誘致し、そは又、立ち代つて特に諸都市に於ける高度の繁榮を來さしめた。斯くて强烈なる經濟的發達が存したのであるが、而も斯くの如き發達は究極に於いて農地的なる性質と其の本質が非累進的なる資本主義の兩者に由つて制限を受けた。是れ等の制限は、夙く既に西紀第一世紀に始まれる地方分散に由つて、勞働資源の問題に固有なる困難に由つて、大規模信用制度の不充分なる發達に基く非農地經濟の永久的に不安定なる性質に由つて、而して夥しき高に於ける貴金錢の外國流出に由り、又或る程度迄は第一世紀に於いて徐々に地歩を獲得せる國家社會主義の最初の起源に由つても亦、設定せられたのである。（pp. 232-233.）。

第二及び第三世紀の經濟は進歩的及び退歩的諸要素の兩者を包含する第一世紀に於いて認められた諸特色の持續的有機的發達である。私企業に基礎を有し、而して都市ブールヂュワ文化に根づかしめられた自由經濟體制に於いて特に一層の進歩が存した。筆者エルテル博士は此の時代の進歩的要素と妨碍的要素とを列擧し、就中、後者中の最重要なるものとして經濟理論の個人主義的原理と相容れざる國家社會主義的傾向の增進を指摘する。あらゆる歷史的過程は其の最初の起原よりして其れ自體の内に自己の破壞を助成しつゝある反抗的諸力を具有する。進歩が行はれつゝある間は、是れ等のものは壓服せられ、若しくは吸收せられさへもするが、而も沈滯不振と共に是れ等のものは表面に浮び上がる。斯くて私經濟の上に基礎を有し而して個人主義と自由とに赴かしむるの傾向ある經濟體制は、其れ自體の裡に管制せられたる國家社會主義の意味に於ける對抗運動の萠芽を匿して居つた。而して、そは今や文明生活の全界域に於ける變化せる狀態によつて必然促進せられなければならなかつたのである。筆者は玆に國家の經濟的干涉に依る自由制度の正常なる制限、若しくは經濟政策又は社會政策に由つて國家が時々私經濟に侵

入することをすら念頭に置くことなく、寧ろアウグスツスが曩きに反對せる所であつたが、第二世紀以降頑强に其の歩を進めたるものであつて、他愛主義よりも寧ろ國家的自我主義によつて、管制及び父性的慈愛によるよりも寧ろ聯隊的編成、標準化及び獨裁的態度によつて特性附けらるゝ底の國家資本主義及び國家社會主義を考察しつゝあるのである。（pp. 255-256.）。

這箇國家社會主義に赴かんとするの傾向は、內部的に益々微弱と爲りつゝある羅馬社會の上に等しく北方及び東方より加へられたる攻擊により、又是れ等の困難を克服せんとするトラヤヌス皇帝の莫大なる努力によつて喚起せられた帝國外交政策最初の大危機の發生を通じて愈々强固と爲つた。軍費支出の問題及び財政の全問題は第二世紀以後に於いて至要なるものと爲つた。政府は增稅と債務の解除との間を往復した。次いで通貨は改惡せられた。（pp. 262.）。第三世紀間に外部よりの危險は一層切迫せるものと爲つた。カラカラの時代に於いて凡そ四十萬を算した軍隊を支持するの費用は固より莫大なる高に上らなければならなかつた。而して兵士の實質賃銀は幾分其の旣に高き水準以上に騰つた。這箇國家的破產の脅威に際して書かれた處方箋は昔ながらの通貨價値削減と增稅とであつた。（pp. 292.）。而して課稅泉源は前世紀中に萎縮し、又セヴェルスの時代以來、愈々多くの土地は耕作を廢せらるゝに至つたが爲めに、國家の要求は一層重壓の度を加へた。斯くて、國家の要求は根本的に遂行不可能であつた。而も、等しく皇帝及び帝國の存在其の者は是れ等のものが遂行せらるゝことに依存した。斯くて人民を其の最後の一滴までも搾取せんとする國家の激しい努力が開始せられた。（p. 263.）。之れと共に、强制及び國家社會主義的規制は一層確乎たるものと爲つた。是れ等のものは逐々に存立するに至つたものであつて、其の最初の起原はトラヤヌス及びハドリアヌスの時代に遡り得るものである。是れ等のものは此の時代に於いては控へ目に適用せられたのであるが、今や發達して確定的制度と爲り、斯くて又第三世紀の初めに於いて新たなる政治理論家によつて案出せられた究極の綜合中に編入せらるゝに至つたのである。（p. 265.）。而して國家の破壞的政策、私經濟生活に對する不斷の干涉及びインフレーションは、歸する所、地主と同樣の結果を來し、有價値なる莫大なる高は其の下に壓し潰されて消滅したのである。斯くてブールヂュワ階級は算を亂して潰滅したのであるが、而もそは下層階級の地位が其の結果改善せられたることを意味するものではなく、彼れ等も亦、苦惱し、愁訴し、同盟罷業を行ひ、叛起したのである。斯くの如くして人口數は實に七千萬より五千萬に減少するに至つた。（pp. 267-268.）。

第三世紀に於ける平和に對する緊切なる要求は結局ディオクレチィアヌスの治世に於ける默從を招來した。帝國の統一はアウレリアヌスによつて回復せられ、內部の混亂は其の度を減ずることゝ爲つた。彼れ及びディオクレチィアヌスは全然亂雜と爲つて居つた通貨、延いては又課稅收入の安定化に着手した。帝國の復興に對して支拂はれた代價は二樣であつた。第一は專制國家の出現であり、第二は完全なる國家社會主義の實施であつた。斯くの如きものは帝國が存在を保ち、又、殘餘の舊ブトルヂュワ社會、舊文化、附帶的には又舊經濟制度が救濟せらるゝを得た唯一の道であつた。最後に、斯くの如きものは新文化が、著しく變化せる形態に於いてゞあり、又恐らくは國家を通じてよりも寧ろ國家に反抗して自己を實現したのではあるが、成熟することの出來た唯一の道であつたのである。（pp. 268-270.）。

斯くて筆者は節を改めて、國家社會主義時代に於ける經濟體制に就いて述べ、而して其の結果に就いて論ずる。恰も國家社會主義が誇張せられたる個人主義に對する反動であつたが如く、今や誇張せられた國家社會主義に對抗して封建の領主によつて代表せらるゝ新たなる個人主義は其の發生を見たのである。古代文化の著大なる部分並び

に之れと共に古代經濟制度の一定部分を救濟せるものは個人主義的貴族階級であつた。從つて此の階級は舊ブールデュワジイ其れ自體の殘存者が企圖せるよりも大なる程度に於いて舊ブールデュワジイによつて演ぜられた役割を引き受けたのである。然しながら、吾人は這般の過程中に於いてブールデュワ的都市文化及び經濟より其の封建的田園的文化及び經濟に移るの傾向が次第に增加しつゝあつたことを認めなければならぬ。而も、這般の變化は實に古代社會の眞終末を劃するものである。（pp. 280-281.）。

三

本章に次いで、吾人に取つて興味あるは、エルランゲン大學古代史教授哲學博士エンスリン氏（W. Enßlin）の筆に成る「ディオクレチィアヌスの諸改革」と題する第十一章であらう。就中、注意す可きものは課稅改革及び鑄貨規制である。眞實の諸物價騰貴を抑止せんとする一般的意向と共に、鑄貨の再評價に由る物價の人爲的騰貴に對する兵士の保護は實に有名なる三百〇一年の物價統制、即ち「物價に關する勅令」發布の理由として其の前文中に掲げらるゝ所である。（pp. 404-405.）。

ハーヴァード大學宗教史教授名譽法學博士ノック氏（A. D. Nock）執筆の「羅馬帝國內に於ける異教主義の發達」、劍橋大學神學教授神學及び文學博士故バーキット氏（Francis Crawford Burkitt）執筆の「異教哲學と基督教會」及び「東方に於ける基督教會」並びに伯林大學教會史教授名譽神學及び哲學博士リーツマン氏（Hans Lietzmann）の「西方に於ける基督教會」等の諸章も亦思想史の研究者に取つては必讀のものであらう。（菊判八百四十九頁。丸善書店賣價金三十五圓六十錢）。

前號（第三十四卷第六號）目次

●再生產理論の構造變化　武村忠雄
——國防經濟學研究の一節——

●近世に於ける西洋地理學　小島榮次
——その史的素描——

●獨逸騎士團について　高村象平
その成立・活動・衰退——

●アダム・スミスと國民主義經濟學　高橋誠一郎
（アダム・スミス歿後一百五十年記念講演會講演）

●ユベル「デモクラフィーと衛生統計に關する講義」　寺尾琢磨

●最近に於ける日本戰時貿易政策論の展望　岩田仞

●一冊定價金五拾錢　郵稅金壹錢五厘
●半ケ年分金貳圓九拾錢〉郵稅共
●一ケ年分金五圓四拾錢〉

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十五年六月廿五日印刷納本
昭和十五年七月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第三十四卷第七號

編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子活版所

發賣元　東京市芝區三田二丁目一番地　丸善株式會社三田出張所　電話三田(45)〈一九二六番 一九二七番 一八五二番　振替口座東京一八二〇四番

●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會　振替口座　慶應義塾　東京一八二〇四番　芝區三田二ノ二